



再婚



勃起不全

春日信彦

子育て

糸島市の自然環境は拓也に新鮮な心をもたらしたが、亜紀の子育ては苛酷な試練を与えていた。早く起きての食事の支度は特に過酷であった。自炊したことが無い拓也は料理の材料を宅配会社の旬工房に依頼した。セットされた材料を調理すれば出来上がりなのだが、拓也にとっては簡単な、煮たり焼いたりの調理もひと苦勞であった。亜紀に好きな料理メニューを選ばせて一週間の献立を作るのだが、一ヶ月でギブアップしてしまった。

とうとう疲労困憊した拓也は二ヶ月目から、朝食はパン、コーンフレーク、牛乳、ヨーグルト、ヤクルトを亜紀のために食卓にそろえた。ブルーベリースフレ、キャラメルメロンパン、粒あんデニッシュ、シュガーチーズパイ、甘いクロワッサン、コアラパン、チーズタルト、ロールハム野菜サンドなどは大好物であった。

夕食は調理済みのおかずセットを注文するようになった。亜紀の好きなおかずは、カボチャコロツケ、ポテトサラダ、マーボー春雨、すき昆布と豚肉煮、キンピラゴボウ、酢豚などであった。ご飯だけは、かろうじて自動炊飯器で三合炊いた。亜紀は新米のご飯が好きで「福岡県産元気つくし」が特に気にいたようで、笑顔でパクパクよく食べた。

亜紀がほしがる牛乳、ヤクルト、ヨーグルト、林檎ジュース、抹茶ロールケーキ、シュークリーム、焼ドーナツ、マンゴープリン、メロン、桃、バナナ、パイナップルなど、当初は休みの日にイオン伊都店で亜紀と一緒に買い物していたが、これらの品々も旬工房に依頼するようになってしまった。亜紀の大好物はPIZZA COOCのピザの「北海道じゃが&バターコーン」とお好み焼きの「ごちそう焼」。亜紀がなんとなくブルーになったときはPIZZA COOCに電話すると、とたんに元気になった。

さやかなのアドバイスで、衣服はネットで購入した。ベルメゾンとセシールは分かりやすく、亜紀が自ら検索して衣服、小物、玩具、家具など選び、拓也がクレジット払いで注文した。亜紀はハローキティ、シュガーバニーズ、ディズニー、ワンピース、ポケモンなどのキャラクターが好きで、リビングに華やかなキャラクターグッズが色とりどりと並べられた。特に、プーさん、ミッキー、ミニーなどのぬいぐるみが好きで、ソファーに並べて遊んだ。

亜紀が幼稚園に通えるかどうか不安だったが、心配をよそに前原中央にある桂女学園大学付属糸島幼稚園に通うことができた。この幼稚園に入園すると大学まで進学できる。しかも、大学までの授業料を2割引で前納することができる。この幼稚園を拓也が選んだ理由は、彼の身に万が一のことがあった場合でも亜紀に大学を卒業させたかったからだ。拓也は毎朝、5時半には起床した。二人分の朝食を準備し、7時には亜紀を起こし朝食をとらせた。幼稚園バスは自宅近くの幹線道路に8時10分に到着した。

幼稚園の年間行事には可能な限り出席した。4月の春の遠足、5月の保護者参観、6月のじゃがいも掘り、7月の七夕まつり、10月の運動会、12月の発表会、2月の演奏会、3月のお別れパーティーなど亜紀が淋しがないように必死になって出席した。今年4月から小学校に入学するが、小学校は小中一貫校となっており大濠公園駅から徒歩で10分ほどのところにある。また、高校と大学が一貫校となっている。

4月からの小学校通学で悩みが起きた。と言うのも、登校時は亜紀を前原駅まで車で送ればいいのだが、帰りが問題となった。前原駅から徒歩で曾根の自宅まで帰れないからだ。ところが、幸運なことに、さやかとアンナは大濠公園駅近くのスカイビュー大濠というマンションに居を構えていた。そこで、下校時は、亜紀はいったんさやかのマンションに帰り、仕事がひけると拓也がさやかたちのマンションに亜紀を迎えに行くという段取りを二人にお願いした。二人は笑顔で快く承諾した。

拓也の帰宅は早くて4時、遅くて7時ぐらいになる。3時半ごろ帰宅する亜紀は拓也が帰宅するまで一人で留守番をする。いつも、絵本を読んだり、ぬいぐるみとお話したり、電子ピアノでお得意の「ねこふんじゃった」を弾いたり、テレビの録画を見ている。亜紀は一人で居ることに耐えるだけの精神力を持っていた。保護されるまで過酷な状況に耐えて生活をしてきたからに違いない。拓也は帰宅するとすぐに夕食の準備をした。テーブルには匂工房に宅配してもらったおかずを並べた。食事が終わると、お風呂に二人で入り亜紀の身体を洗ってやった。就寝は9時と決めていた。亜紀が寝床に入るとご褒美に20分ほど絵本を読んであげた。

育児放棄をされた亜紀であったが、2歳のころまでは母親がよく絵本を読んであげていたらしい。亜紀はそのことをよく憶えていていた。糸島市には「パピルス号」と言う移動図書館がある。亜紀はこのパピルス号がお気に入り、いつも一度に絵本を10冊以上借りた。休みの日には必ず読んであげた。いないないばあ、じゃあじゃあびりびり、はらぺこあおむし、うさこちゃんとうみ、たべたのだあれ、でんしゃ、ぐりとぐら、わたしのワンピース、どろんこハリー、はじめてのおつかい、からすのパンやさん、キャベツくん、わたしとあそんで、じごくのそうべえ、おへそのあな、とにかく亜紀のために声がかかれても頑張って読んであげた。

休みの日には二人でドライブに出かけた。亜紀は車が好きで車に乗っているだけで笑顔が出た。拓也も糸島周辺の観光地に興味があり、とにかく手当たり次第カーナビを頼りに走りまくった。糸島市の白糸の滝、千寿院の滝、芥屋の大門、二見が浦、加也山、笹山公園、姫島、幣の浜、姉子の浜、唐津市の七つ釜、呼子、鏡山、唐津城、佐賀市のどんぐり村、有田陶器市、有田ポーセリングパーク、福岡市のもーもーランド、大濠公園、西公園、舞鶴公園、黒田城、ヤフードーム、亜紀の好奇心に操られて時間が許す限り足を運んだ。

拓也にとってもっとも苦手なことは亜紀との会話であった。5, 6歳の女の子とといったいどんな話をすればいいか、まったく検討もつかなかった。とりあえず、亜紀の話を頷きながら無心に聞いてあげた。幼稚園の先生の話、友達と遊んだ話、習い事の話、絵本の話、歌手の話、服装の話、ぬいぐるみの話、亜紀の口から出る言葉を一言も逃さないように聞き耳を立てた。二人で暮らし始めて、一ヶ月ぐらいまでは拓也に遠慮がちであったが、次第に打ち解けてきたのか、口数が多くなってきた。拓也はほんの少しほっとした。

拓也はX J R 1 3 0 0のバイクで天神にある医進ゼミナール予備校まで通勤している。昨年、拓也は姪浜ドライビングスクールで無事自動大型二輪免許を取得した。予備校まで当初はプリウスで通勤したが、渋滞に巻き込まれると通常は約一時間の通勤時間が2時間以上にもなったからだ。バイクだと約50分で予備校に到着した。幸運なことに、今年4月、糸島市にロボット工学医療を取り入れた桂医科大学が5年の建設期間を経てようやく完成する。今年9月が一期生の入学予定だ。ドクターの勧めで、今年9月からは桂医科大学の数学教授として勤務することが決まっている。

勃起不全（ED）

亜紀との暮らしは拓也にとって人生のやり直しのようなものとなった。かつて佳恵の子育てはしたが、うわべだけの薄っぺらなものであったことにつくづく思い知らされた。佳恵の子育てはほとんど律子がやっていたことに改めて気づかされた。今年に入り子育てのストレスはピークに達していた。亜紀との生活は今までに無い新鮮な活力に与えたが、一方、責任感が重くのしかかり心が押しつぶされてしまった。

拓也は誰かに癒してほしかった。亜紀を養子にしたことを何度も悔やんだが、もはや、今となってはどうすることもできなかった。さやかを時々恨んだが、亜紀を養子にすることに最終決断を下したのは拓也自身であった。無我夢中の一年半の子育てであったが、今後の子育てを思うとまったく自信が無かった。亜紀が思春期を迎えるころ、拓也は還暦を迎えることになる。一人の老人が思春期の少女を育てる姿を思い浮かべると、拓也は地獄に落とされる思いであった。

亜紀を養子にしたことは一大事件をもたらした。あの時はまさかこんな事態を引き起こすとは夢にも思っていなかった。さやかに亜紀のことを依頼されたときは亜紀の不憫さだけが重くのしかかり、自分の将来のことは何も考えず、勢い余って引き受けてしまった。しばらくして気持ちが落ち着くと、突然、瞳の顔が脳裏を占領した。養子の件は、引き受ける前に瞳に相談すべきであったことに気づいた。事後報告になってしまったが、恐る恐る、瞳に養子の件を報告した。

瞳は養子の件を聞けば、「どうして勝手なまねをしたの！」ときっと興奮して怒鳴ると思っていたが、意に反して、まったく冷静に「そう～」と言ったきりだった。拓也はそのときはその意味がよく分からず、電話を切った。去年の12月に入り子育てのストレスのはけ口を求めて瞳に電話した。拓也は子育ての苦労と今後の不安を訴えた後、瞳に結婚の意志を確かめるべく、嘘の再婚話をした。

「亜紀のことを考えて、今つき合っている彼女と結婚しようと思う」言ったところ、「それはよかったじゃない、拓也が幸せになれるんだったら、大賛成よ！」と明るい言葉で賛同した。青天の霹靂とはこのことで、拓也は驚き以上に地獄に突き落とされた思いであった。今まで何度と無く瞳にプロポーズして、じらされた挙句、とうとう拒絶のパンチを食らってしまった。人生最大の失恋だった。もはや、心は完全に折れてしまった。

亜紀を養子にしたことが、瞳にとってはプロポーズを断る絶好の材料だったに違いないと拓也は悔やんだ。もはや、後の祭りであった。瞳は長く付き合っているパトロンがいた。瞳はそのことを理由にプロポーズを断る勇気が無かった。瞳は拓也のことを長い間思い続け今でも愛していたからだ。悪い女だと思いつつも、瞳は拓也を突き放せなせずにいた。亜紀を養子にしたと聞いたとき、きっといつか結婚を切り出すと瞳は予想していた。予想は的中し、タイミングよくプロポーズを拒絶した。

塗炭の苦しみとも言える失恋は拓也を女性不感症に陥れてしまった。それが肉体的に現れた。勃起不全になってしまった。もはや、拓也にとって女性はどうでもよくなってしまった。失意と共に再婚をあきらめかけた拓也であったが、亜紀の子育てには協力者が不可欠であった。そもそも、亜紀の養子の件はさやかが持ってきた話であった。だから、亜紀の子育てはさやかにも責任があると拓也は考えた。考えれば、考えるほどさやかが憎たらしくなったが、今となってはさやかに頼るしかなかった。

拓也は子育ての悩みをさやかに打ちあけると、さやかは「名案があるわ！」と拓也が電話してくるのを待っていたかのように即座に返事した。さやかはアンナをつれて拓也の家に遊びにやってくるようになった。さやかの名案はろくな事ではないと思っては見たが、藁にもすがる思いで首を長くして待った。金曜日、二人は大濠公園駅から地下鉄に乗って筑前前原駅で降りると、駅からタクシーで平原歴史公園に午後2時半に到着した。拓也は4時ごろ帰宅予定のため、二人は平原遺跡を見学しながら今後の活動について話し合うことにした。

アンナは遺跡にあまり興味は無かったが、平原遺跡が卑弥呼の墓であるかどうかについては関心があった。拓也はここが卑弥呼の墓だと信じている。この墓は女王の墓であることはほぼ間違いないが、卑弥呼の墓と確定する材料は無い。46.5cmの日本最大の銅鏡の出土から、かなり大きな権力を持った女王といえるが、邪馬台国の所在がいまだ明確でない以上、卑弥呼の墓と断定することはできない。平原遺跡は考古学者、原田大六氏と糸島高校の大神邦博先生によって発掘が進められ、彼らは銅鏡、勾玉、管玉など多くの貴重な出土品を収集研究した。

二人は公園のベンチに腰かけるとさやかはドクターから入手した極秘情報を話し始めた。「アナ、今、とんでもない大量殺人計画がC I Aによって密かに進められているの。殺人のターゲットは高血圧の男性なの。もう少し、分かりやすくいえば、勃起力が衰えた40歳過ぎた男性ということになるわね。何を使って殺すかというとスーパー勃起薬。つまり、この勃起薬は即効性があり、飲んで1分後には効果が現れるの。一般男性はもちろん、勃起不全の男性にも効果があるの。ところが、この勃起薬を飲むと徐々に血圧が上がり、5分後には200ほどまで血圧が上がるのよ。そのとき、興奮状態にあればもっと血圧は上がるわね。

だから、高血圧で血圧降下剤を飲んでいるような男性が飲むと、突然の高血圧で脳溢血になるのよ。C I Aの息のかかった製薬会社が、この勃起薬を精力剤として今年の夏ごろからネットで販売するらしいの。バイアグラ以上の効果があると宣伝すれば、世界中の中高年の男性や勃起不全の男性はきっと購入すると思うわ。そうなれば、多くの高血圧の男性たちは腹上死するに違いないわ。まったく、弱みに付け込んだ殺人計画じゃない。許せないわね」さやかはドクターからの話を分かりやすく話した。

「バイアグラは聞いたことあるわよ。多くの中高年男性が購入しているらしいじゃない。男って、勃起しなくなると惨めになるんだろうね。分かるような気もするわ。バイアグラ以上に効果があると知れば、絶対買うわね。でも、この勃起薬を飲むと脳溢血になるんだったら、これは薬物殺人兵器じゃない。本当に、卑劣なことをするわね。むかつくわね！」アンナも卑劣なやり方に顔を真っ赤にして憤りを現した。

さやかはなぜかニッコリすると笑顔で話しはじめた。「そこでアンナの出番って言うわけ。今回、選ばれたスケベ面の自民党の新党首がいるでしょう。この新党首はとんでもないやつなのよ。CIAの手先なの。もし、この新党首が総理にでもなれば日本は終わりよ。早く手を打たないと、とんでもないことになるの。分かるでしょ。何をやってほしいか？」さやかはアンナを覗き込んだ。

アンナは引きつった顔で眼を大きくして叫んだ。「分からないわよ。何をやれっていうの、まさか、党首を拉致しろっていうんじゃないでしょうね。もういやよ、あんな危険なこと。一度だけって、言ったでしょ」アンナは顔を大きく横に振った。さやかはまたニッコリ笑顔を作ると、ささやくように言った。「安心して、拉致はしないわ。今度はC I Aの兵器を利用するの。つまり、新党首にスーパー勃起薬を飲んでもらって天国に行ってもらうの。新党首は高血圧で血圧降下剤を常用しているという情報が入ったのよ。だから、きっと・・・名案でしょう」さやかは親指を立てた。

キョトンとした表情のアンナは質問した。「だから、いったい、アンナに何をしろっていうのよ。もっと、分かりやすく話してよ。アンナは物分りが悪いんだから」アンナは頬を膨らませた。さやかはドヤ顔になるとあたりを見渡してさらに小さな声で話しはじめた。「閣僚はじめ多くの代議士が出入りしているゴールドパールっていうクラブが赤坂にあるの。この新党首もこの店の常連客なのよ。もう分かったでしょ。アンナがゴールドパールのホステスになるってこと。後は、アンナの色気で新党首をホテルに誘って、スーパー勃起薬を飲ませるの。間違いなく、天国に行ってくれるわ」

アンナは顔を真っ赤にすると「それって、殺人じゃない。いやよ、あの時は拉致だったからさやかのためにやったけど、殺人はいやよ」アンナは大きく顔を何度も横に振った。「アンナ、それは誤解よ！精力剤を自ら飲んでもらうんだから、殺人じゃないのよ。精力剤を飲んだら、たまたま脳溢血で倒れたというだけのことなのよ。倒れても、死ぬとは限らないの。政治生命は終わるかもしれないけど。まったく、不慮の事故に過ぎないのよ。安心して、アンナ」さやかは冷静な顔でアンナを説き伏せようとした。

アンナはあきれた顔をすると「飲むか、飲まないかは本人の意思だけど、これは未必の故意って言うのに当たるんじゃないの。新党首は高血圧なんですよ、やっぱし、できないわ」アンナは眼を吊り上げてさやかを睨みつけた。「アンナ、この仕事はアンナにしかできないのよ。一流のホステスにさやかがなれると思う？もし、この新党首が総理になったら日本人はC I Aの奴隷になってしまうの。そして、わけの分からないウイルスを日本中に撒き散らして、一人でも陽性反応が出ると家族全員が強制収容所にぶち込まれるの。それでもいいの」さやかは悲しそうな目でアンナに訴えた。

「分かったわよ、とにかく、精力剤を勧めるだけだからね！無理には勧めないからね！飲む、飲まないは本人の意思だからアンナには何の関係も無いってことね。そういうことよね！」アンナはさやかの同意を求めた。さやかはニッコリすると「もちよ！アンナは何の罪も無いわ。本人が勝手に飲むだけだから。アンナは何にも知らない顔をしていればいいのよ」さやかは強い口調で言いくるめた。

アンナが承諾した表情を見せると「アンナにはお願いばかりしてごめんね。今度は感謝を込めたのプレゼントがあるの。アンナが最もほしがっているものをあげられると思うの」さやかはあいまいなプレゼントの話をした。アンナは最もほしがっているものと聞いて頬が緩んだが、さやかが言っていることがピンと来なかった。「さやか、もっと分かりやすく言ってよ。何をくれるのよ」アンナはじれったくなってさやかの肩をゆすった。

「まあ、話を聞いてよ。三日前に拓也から電話があったと言ったでしょ。拓也は亜紀の子育てでノイローゼ気味になっているの。すでに限界に来ているみたいね。拓也は、名案は無いかと言ってきたの。そこで名案があると、即座に答えてあげたのよ」アンナは拓也がノイローゼになったと聞いて顔色が青くなった。「拓也はそんなに落ち込んでいるの。まさか、自殺しないでしょうね」拓也は意外と気が小さいことを知っていた。

「自殺はしないと思うけど、亜紀を育てる自身がないと嘆いているのよ。再婚したくてもできなくなったし、さやかにも責任があるんじゃないかと怒っているのよ。拓也はパニックって錯乱しているみたいね。当然といえば当然なんだけど。拓也には気の毒だったけど、これはさやかの策略だったの。例の彼女と別れさせるための！」さやかはドヤ顔でアンナを見つめた。

「え！例の彼女と・・・、亜紀がいたんでは結婚する気がしないわね。さやかもかなり性悪女ね！再婚できなくなったって、彼女との再婚のことね」アンナは大きく頷いた。「でも、拓也にとって決して悪いことじゃないのよ。いつまでも昔の彼女に未練を持って、拓也はバカを見ることになるのよ。きっと、例の彼女は結婚する気は毛頭無かったと思うの。だから、亜紀を養子にしたことをきっかけに結婚を断ったのよ。思うに、彼女も悪女よ。さやかは拓也を救ってあげたのよ。アンナ、分かるでしょ」さやかは弁解がましかったが、アンナには分かってほしかった。

「そういわれれば、拓也は不毛の片思いをしていたわけよね。そこで、さやかが拓也の眼を醒ましてあげたということね。納得！だけど、いったい、アンナはどんなプレゼントをもらえるの？」アンナはさやかの顔をまじまじと見つめた。「もう分かったでしょ、拓也は例の彼女と再婚できなくなったのよ。だったら、後は誰と再婚するか？決まっているじゃない」さやかはアンナの顔を指差した。

アンナは自分の人差し指で自分の顔を指差すと「え！アンナ！アンナが拓也と結婚するの！本当にできるのね、本当に、さやか」アンナはジャンプするように立ち上がった。「きっとできるわ。拓也は絶対再婚したいのよ。一人で亜紀を育てることに、もはや耐えられないのよ。今がチャンス！今夜、決行するわよ」さやかはアンナのお尻をパチンと叩いた。天にも昇る思いのアンナはゆっくり腰かけると、さやかを抱きしめた。「やっと、夢がかなうのね、拓也のお嫁さんになれるのね、亜紀のお母さんになるのね」アンナは青空を眺めながら両手を組んで神に祈った。

「アンナ、何、浮かれているのよ、これからが本番じゃない。今夜のために今から作戦を練るのよ。2月22日、今日は拓也の誕生日なのよ。夕食は亜紀が好物のPIZZA COOCのピザにしよう。アンナは思いっきり亜紀のお母さんになりきって亜紀と拓也の世話をやくの。亜紀はアンナのことを気に入っているし、きっと亜紀も喜ぶわ。話題はAKB、SKE、みんな誰押しか言い合うの。アンナは麻里子様、さやかは優子、亜紀はくーみん、だったわね。拓也は誰押しだろうね？とにかく、今夜はわいわい騒ぐのよ」さやかは今度こそ拓也を攻略できると自信に満ちていた。

次に最も重要な段取りを話しはじめた。「アンナ、今夜が勝負よ。アンナ、亜紀、さやかは川の字になって一階で寝るの。拓也は二階ね。亜紀がぐっすり眠りについたら、アンナはそっと抜け出して二階に上がるの。そして、拓也の布団の中にもぐりこみ、耳元でささやくの。亜紀のお母さんになりたい！これが決め台詞よ。今度はきっと気持ちが動くわ。拓也は藁をもつかむ思いなのよ、亜紀のために再婚したいのよ。分かった！」さやかは演技の指導をした。

アンナは握りこぶしを作り大きく頷いた。さやかはガッツポーズを作るとスッと立ち上がった。バッグから携帯を取り出すと、グランママに注文をしていた誕生日ケーキとシュークリームを引き取りに行くために亜細亜タクシーに電話した。二人がケーキを抱えて拓也宅に到着したのは4時半を過ぎていた。

災いを転じて福となす

アンナが玄関のインターホンを鳴らすと亜紀がドアを開けた。「こんにちは、また、お邪魔しますう〜」アンナはいつものおどけた挨拶をした。「いらっしやい、オネ〜チャマチャマ」亜紀も笑顔で応えた。拓也がリビングから跳んでやってきた。笑顔を見せると「さあ、どうぞ、どうぞ」拓也は落ち込んでいるところを見せたくないのか、特に今日は陽気に振舞った。「亜紀ちゃん、今日はパパの誕生日ね、ケーキ買ってきたよ。パパをからかって、みんなでワイワイ騒いじゃおうね」アンナもいつも以上に子供のように陽気に振舞った。

アンナはミッキーの包装紙で包まれたボックスをそっとテーブルに置いた。グリーンのリボンをほどき、包装紙を開くと両手で箱のふたを開けた。すると拓也が大好物のチョコレートケーキが現れた。拓也と亜紀を席に着かせ、アンナとさやかは三人分のワイングラスと亜紀のグラスを用意した。アンナは3つのワイングラスにシャトー・クリネの赤ワインを注ぎ、亜紀のグラスにオレンジジュースを注いだ。ケーキに7本のローソクを立て、火をともした。部屋のライトを消すと炎の明かりでみんなの顔が輝き始めた。

Happy Birthday Takuya～歌声の後に続いて、拓也はニコツとすると口を尖らせ勢いよく7本のローソクの炎を消した。三人が拍手すると「ありがとう、年はとっても気持ちは27歳です。ワハハ～～」拓也は隣に座っている亜紀を見つめ大げさに笑った。アンナがAKBの話を切り出し、アンナは誰押しか拓也に尋ねた。拓也は恥ずかしそうに「ゆいはん、で～す」と元気よく叫んだ。さやかが部屋のライトをつけるとアンナはケーキをカットし、それぞれの取り皿にケーキを運んだ。

「アンナオネ～ちゃん、まりこは前原出身で、糸島高校の卒業って、知ってた？糸島高校って、すぐそこにあるんだよ」亜紀はAKBのメンバーについていろんなことを調べていた。「へ～、知らなかったわ、亜紀は物知りじゃない、一度、糸島高校ってところに見学に行ってみようかな。アンナは中卒なの。でもね、秋から、中洲女学院大学に通うことになったのよ。美人偏差値67が評価されて、芸能学部俳優科に特待生で合格したの」アンナは初めて亜紀に自慢話をした。

明日、拓也は休みだが、亜紀は幼稚園のため、食事を終わると全員9時に就寝した。拓也は二階、アンナ、亜紀、さやかは一階に寝床を取った。亜紀が幼稚園に行った後、さやかは例の名案を拓也に教えることにしていた。拓也はアンナとさやかたちと久しぶりにバカ騒ぎできたことで少しは気が晴れた。今までの子育てをいろいろしゃべったことで、今まで鬱積していたストレスがほんの少し解消した。

瞳との再婚の切望が今までアンナを無視させていたが、再婚の夢が破れた今、拓也の想いは徐々にアンナに向かっていった。拓也は自分一人では亜紀を育てられないことをしみじみ身にしみて感じていた。心の底ではアンナと再婚できれば最高の幸せと思ったが、22歳も年下のアンナにプロポーズする勇気は無かった。親子の年齢差を考えると、世間の目が気になって怖気づいてしまった。もし、アンナと結婚できれば、きっと亜紀も喜ぶと思ったが、それでも「結婚してほしい」と言い出せなかった。

亜紀がぐっすり寝入ったころ、アンナはそっと寢床を出ると二階に向かった。足音を立てないようにつま先で階段を上り、そっと部屋のドアを開けた。拓也はぐっすり寝入っていた。アンナは腰をかがめると少し布団をめくりそっと拓也の横にもぐりこんだ。拓也はまったく身動きしなかった。アンナは右手を拓也の胸の上に置くとゆっくり胸をなでた。拓也が薄目を開けて顔を右に傾けるとアンナは即座にささやいた。「亜紀のお母さんになりたいの、拓也！」アンナは左耳を下にして頭を拓也の胸の上に置いた。

拓也は左手でアンナの髪をそっとなでると「ありがとう、僕でよければ、結婚してほしい、アンナ」拓也は清水の舞台から飛び降りる思いでプロポーズをした。「はい！」アンナの眼から涙がこぼれていた。しばらく、拓也は黙っていたが、「でも、今すぐにはできそうも無いんだよ、ごめん」拓也は勃起不全のままでは結婚できないと思った。「え！どうして？まだ、彼女のことを忘れられないの？」アンナは強い嫉妬に駆られた。

「いや、違うよ。言わないと誤解されるから打ち明けるよ。なぜか、女性不感症になって、勃起不全になってしまったんだよ。つまり、あそこが使い物にならなくなったんだ。情けないけど、どうしようもないんだ」拓也は誤解されるより、恥を搔くことを選んだ。アンナは勃起不全という言葉聞いて、不吉な不安に駆られた。アンナはどのようにリアクションしたらいいか戸惑った。

「きっと、疲れているのよ、心配ないわ。しばらく、休養して、精がつくものでも食べれば、また、元気になるよ」アンナは顔を起こすと拓也をじっと見つめた。拓也の顔にはまったく精気がなかった。アンナは拓也の股間に右手を入れた。まったく萎えきったあそこをしばらく揉んだが、いっこうに硬くならなかった。アンナは一大事件であることを改めて実感した。アンナは拓也におやすみを言うと階下に降りていった。

さやかと亜紀はぐっすり寝入っていた。さやかの肩をつんつんと突付いて起こすと、さやかを隣の部屋に招いた。アンナは拓也の事件をどのように話していいか迷ったが、右手が感じたことをありのままに話すことにした。「さやか、大変なことになったよ。結婚はダメかもしれない。拓也のあそこが、ダメになったのよ」アンナは興奮していた。「アンナ、もう少し分かりやすく話してよ。ダメってどういうこと？」さやかはアンナを落ち着かせた。

「拓也は、女性不感症になって、勃起しなくなったの、Hができなくなったのよ」アンナは右手の感触を思い出していた。「女性不感症！きっと、彼女に振られたことが原因ね。アンナ、あきらめることは無いわ、災いを転じて福となす、って言うじゃない。今がチャンスよ、拓也をしっかり看病して、元気にしてあげることができれば、アンナは立派な妻ということじゃない。Hができなくても結婚するのよ」さやかは今こそ結婚すべきと激励した。

アンナは眉を下げて「もし、あそこが元気にならなかったら、子供ができないってことよね。子供、産みたいんだけど」アンナは淋しそうにつぶやいた。さやかはアンナの右肩をポンと叩くと「心配御無用！万が一、Hができなくても、子供は産めるのよ。拓也の精子を取り出して人工授精ができるの。だから、安心して」アンナはほんの少し笑顔を見せた。「分かったわ、拓也のために全力を尽くすわ。亜紀のためにもいいお母さんになって見せる」アンナは少し大きな声をだしてしまった。

突然、ふすまが開くと亜紀が立っていた。「オネ～ちゃんたちどうしたの？」亜紀は大きな声に起きてしまった。「ごめんね、起こしてしまって、亜紀ちゃん一緒に寝ようね、いい夢、見なくっちゃ」アンナは笑顔を作り亜紀の前で両膝をつくと、両肩を包むようにそっと手を添えた。アンナ、亜紀、さやかは川の字になって寝床についた。アンナは純白のウエディングドレスを身にまとったバージンロードを歩く姿を思い浮かべ、そっと眼を閉じた。

再婚

<http://p.booklog.jp/book/59399>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/59399>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/59399>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ